

青髭 1

明広訊

夜の帳はすでに降りているが、街の灯は昼間の太陽を切り刻んでばらまいたように、心とは裏腹に明るすぎる。馬車が往路を流れていく音、人々の、足早に自宅へと急ぐ音、それらはけっして明るい未来を予想させる福音には聞こえなかった。

青年は、王都ナルボンヌの街を歩いている。さる伯爵家へ最後の伺候をするためである。20歳後半の、この何処にでもいそうな平凡な容姿の男は、しかし、執事としてかなりの高評価を受けていた。だから、彼の雇い先は最後の最後まで辞表を撤回させようと思っていた。たとえ、それに失敗してもこれまでの仕事ぶりに報いるべきだとしていた。

それをよく理解しているからこそ、ナルボンヌを去ることが辛かった。家を飛び出して10年近くになるが、よくも自分のような男を、当時は少年にすぎなかったが、雇い入れてくれたと思う。あの当時からいえば比較にならないくらいに知恵がついた、今となれば、きっと、奥様も事実気づいていたのだと青年は思っている。

「きっと、私の嘘を見通していたにちがいない……」

だが、それを質すようなことはすまいと心に決めていた。

いま、彼は蠟燭の灯りで周囲から浮いている、そう表現するほどに一際目立った門の前に立っている。これが最後の奉公かとおもうと胸に去来するものの、じつに重いことか。最初に立った、あれは夜ではなくて昼間であってあまりにも豪華な門に「開門！」と叫ぶのにどれほど躊躇したことか。

当時とちがって門番の態度は、同一人物にもかかわらず、180度ほど違う。彼もすべて知っているので丁重さが倍増しとなっている。屋敷の中に入るまでできれば歩いていきかけたが、馬車が容易されていた。まさかこれほどまでとは……戸惑う以前に奥方は気づいているのだ、あの方も意地悪い真似をなさる、苦笑を禁じ得ない青年は御者が扉を開くのを確かめると中に入った。

屋敷は門以上に明るい。使用人たちは言いつけられた仕事のために足早に移動しながらも、ちらっと青年の顔を視て頭を下げることを忘れない。この者たちは、何も気づいていない。そうおもうと気が楽だった。

意識せざるをえないのは、これから出会うことになる、この家の主人である女伯爵である。

階段を上がっていくつか踊り場を通過すると、主人の居室が目の前に出現する。青年が目配せ

すると少年が部屋を開ける。

「ようこそ、アンリ」

「ご、ご主人様…」

驚いたことに、部屋の入口に立っていたのは、使用人などではなく長い間、青年を雇っていた主人だった。

「……」

もはや、どうなさったのですかと伺う気分ではなかった。そうなのだ。彼女はすべて御見落としなのだ。

彼女は、40歳をとうに超えているはずだが、とてもそうは見えない。蠟燭の灯りは、太陽光とちがって皺を濃くするものだが、そのような常識はこの女性には無用のものだった。若作りなどしなくても十分に美しい。

青年は、やんごとなき中年の女性の、いかにも若作りしました、というかんじの厚化粧すがた、お前、そのまま場末劇場の舞台に上がれるぞと叫んでやりたい女が、王都には闊歩しているものだ。

それと比較にならないくらい、彼が誇る主人は輝かしい。

彼女は銀の蠟燭立てを持っていた。こんなことは本来ならば使用人のすることだ。しかし、それをあえて青年に対して行う、ということは、すくなくとも彼を同クラスだとみなしている、ということの意味する。もっとも、貴族とはいってもピンからキリまであるのだが、青い血を誇る貴種たるもの、自分たちは選ばれた伝統的な血族、という意識は強いから、最下位レベルであっても、扱う方が王や皇帝、それにミラノ教皇であっても、彼を平民と同列にすることはありえない。

彼女は、それを動かすと、普段食事用につかっている豪華なテーブルの上が青年の視界に入ってきた。そして、その上には豪華な食事がのっていた。

今から思えば、さきほどの使用人たちの態度は、主人がどうしてここまで青年を厚遇するのか、その疑問に根差していたようにおもわれた。

たしかに、これは破格のもてなしである。まるで長いこと出会わなかった血族に対して行うようなやり方と言うしかない。